まえがき

子どもの時から、本を読むのがなにより好きでした。読んで、考え、いいなあと思うことが喜びでした。そして、娘時代に国文学を学び、ずっとその世界から離れずに生きてきました。古典について書いたり、語ったりすることが、いつか大切な仕事になっていました。

そんな私が「しんぶん赤旗」から、月一回の古典連載の仕事をいただいたのは、なんとしあわせなことだったでしょう。いままでの仕事の総まとめにもしたいと思い、毎月心燃えて書きました。

今日までいろいろ読んできた古典の中から、とりわけ心ときめいたもの、忘れられない印象を持ったものを選び出し、もう一度読み返し、感動を新たにし

て書きました。また、読んでいなかった古典にもあたってみて、おや、こんな魅力的な場面や、こんな味わい深く美しい表現があったのか、知らなかった、と発見の喜びに胸おどらせて書いたものもあります。

古典の世界は多彩です。子を思う親の愛。恋の種々相。別れのいたましさ。達人の教訓。悲しみの中のせつないユーモア。いとしい動物たち——そんな古典の感情世界をできるだけ多面的に拾いあげ、伝えたいと心がけながら、書き進めていきました。

毎月、書き終えた原稿を渡すと、さて来月は何を書こうかと思案し、どの古典のどの場面ということを選び出すと、参考書も集めて勉強し直し、ゆっくりと頭の中で素材を転がし続け、発酵を待ち、視点がきっちり決まると、そこで、いそいそとペンを執りました。下書きが真っ黒になり、最後にていねいに清書をするのです。渡すと、また、来月は何をと思案する。毎月そのことの繰り返しでした。

〈弐〉に収められた平安女流三日記の考察は、主婦の友社の『ゆうゆう』誌に書いたものです。三つの日記のそれぞれに個性が光る作者の生き方と心を、いまの女性の生き方に重ねて考えてみたいと、これも意欲満々で書いた作品です。

この本のタイトルにもある「学び直しの古典」という言葉は、学校時代に習った古典を、おとなになってもう一度学び直してみようという意味ですが、もうひとつ、書き手の私自身が学び直し、新しい発見をして感動し、それを伝えるために書いたという意味もこもっているのです。

古典は、けっしてかびくさく縁遠いものではありません。その中には人間の生き方のあらゆる姿、あらゆる喜怒哀楽がつまっています。古典の登場人物たちの心は、現代を生きる私たちの心の中にも脈々と流れ込んでいます。その言葉は私たちの心にくぐり入り、魂を揺り動かす力を持っているのです。

この本が読者の方にとって、生き方のヒントになり、励ましにも、支えに

も、希望の道しるべにもなれば、作者の私としては、わが意を得たりと、大変うれしいことなのです。

表紙を「春風馬堤曲（しゅんぷうばていのきょく）」の詩趣豊かな絵で飾ってくださった首藤教之先生は、連載中も、文章を深く読み込まれ、自由自在な発想を加え、楽しい紙面にしてくださいました。装丁の宮川和夫さんと合わせて厚く御礼申し上げます。「しんぶん赤旗」学術・文化部の平川由美さん、『ゆうゆう』編集部の浅野信子さん。大変お世話になりました。お心こもる応援をいただき、どんなに力づけられたでしょう。感謝の心でいっぱいです。

本を作っていただいた新日本出版社、そして、編集担当の久野通広さん。終始温かくこまやかなお心をいただき、ほんとうにありがとうございます。

この本が多くの読者に愛され、心の友になってくれますように。

二〇一二年早春

清川　妙

心ときめきするもの——学び直しの古典＊目　次

まえがき　1

〈壱〉

香る叙情を溶かしこむ――『春風馬堤曲』与謝蕪村の濃いロマン　10
一途さとけなげさと――『堤中納言物語』虫愛づる姫君　17
心の手当てになる言葉――『枕草子』『和泉式部日記』雨の日の恋歌　23
草木虫魚に心打ち明け――『万葉集』『伊勢物語』ほのかに飛ぶ蛍　29
小声のアドバイスの優しさ――『十訓抄』ちょっといい話　35
無常の覚悟、存命の喜び――『徒然草』兼好法師の死生観　41
待つ女の心根のあわれさ――『雨月物語』浅茅が宿　47
自我貫く魂をわがものとして――『更級日記』竹芝寺の伝説　54
喜劇の味漂う「恋の悲劇」――『大和物語』平中と緋色の袖の女　61
悲しみの中に灯るおかしさ――『世間胸算用』鮪売り八助の失敗　68
未来を洞察し、祝福の予言――『古事記』因幡の白兎　75
花はわが心の友――『万葉集』梅花の宴の歌　81
幻の桜 うつつの桜――『おくのほそ道』芭蕉が見たもの　88
心優しく素直な説話――『宇治拾遺物語』雀報恩の事　94
兼好の心の幅の広さ――『徒然草』見ぬ世の友　101
人生の目利きの会心作――『花月草紙』松平定信の開けた心　106
清貧に生きた楽しみ上手――『独楽吟』橘曙覧の五感の冴え　113
月光に心裁かれた男――『大和物語』姥捨伝説　120
花に寄せる心は恋に似て――『万葉集』秋萩の歌　126
慈悲の鹿と忘恩の男――『宇治拾遺物語』五色の鹿　132
山吹の帰り花――『枕草子』中宮定子の手紙　139
滑稽の後、しんと悲しみ――『世間胸算用』鼠の文づかひ　145

〈弐〉

枕草子・金言集 154
小さきものはみなうつくし 154　うれしきこと二つにて 157
親などのかなしうする子 161　ふと心劣りとかするものは 163
せめて見れば 166　ありがたきもの 169
平安時代の三つの日記 173
『蜻蛉日記』――一夫多妻への抵抗と哀歌 175
『更級日記』――亡くなって目覚めた夫への愛 185
『和泉式部日記』――恋多き女のせつなさ 194

カバー・文中挿画＝首藤教之
装丁＝宮川和夫事務所